

3 真宗と曹洞宗が多い名古屋寺院

名古屋の寺院をみてみると、とくに真宗と曹洞宗の多いことが明らかになる。清須より名古屋への遷府当時は、百余カ寺があり、曹洞宗の三四カ寺を筆頭に、浄土宗二四カ寺、真宗、日蓮宗の各一五カ寺であった。しかし、遷府後の貞享五年（一六八八）は、浄土宗鎮西派の五九カ寺を筆頭に、曹洞宗の四八カ寺、真宗四一カ寺の順になっており、文政年間（一八一八〜三〇）までは、この順序であった。ところが、天保一四年（一八四三）の漢文序のある『尾張志』によると、五六カ寺の真宗が筆頭となり、四九カ寺の曹洞宗、四六カ寺の浄土宗の順に変わっている。

明治二年（一八六九）の高力全休庵の『尾府全図』によれば、浄土宗六四カ寺、真宗六二カ寺、曹洞宗六〇カ寺の順に変わり、『名古屋市史』社寺編が編纂された大正四年（一九一五）頃は浄土宗九五、曹洞宗七七、真宗六五（大谷派四七、本願寺派一八）の順である。その後、隣接する町村との合併編入によって市域が広がり、寺

院数が増えていき、昭和二年には一三二カ寺の曹洞宗、一一五カ寺の浄土宗、一一一カ寺の真宗と続き、同一二年も一五四カ寺、一六教会(布教所)の曹洞宗、一二〇カ寺、一一教会の浄土宗、一一四カ寺、八四教会の真宗の順となっていた。

戦後の昭和三三年(一九五八)には三一三カ寺の真宗、二〇七カ寺の曹洞宗、一二一カ寺の浄土宗の順に変わり、その後は多少の増減があるものの宗派順は変わらず、平成八年には三三一カ寺の真宗、二二七カ寺の曹洞宗、一二五カ寺の浄土宗の順になっている。ただし、真宗はその中の二七九カ寺が真宗大谷派で、続いて二六カ寺の浄土真宗本願寺派、二一カ寺の真宗高田派と続き、圧倒的に真宗大谷派が多い。したがって、名古屋の寺院は真宗大谷派と曹洞宗で約半数を占めていることが明らかになる。

このように、江戸初期は曹洞宗が最も多かったが、次第に浄土宗鎮西派が多くなっていった。それは徳川家の保護が加えられ、藩主一門の菩提寺を建立していったためである。ところが、江戸後期には真宗が最

も多くなり、明治期には真宗、浄土宗、曹洞宗の三宗が大体同数になった。大正期には浄土宗が最も多かったが、昭和初期の市域の拡大によって、曹洞宗がトップとなった。真宗は教会、布教所、説教所として地元町内に親しまれていたが、昭和二〇年一二月、宗教法人の設立が認可制から届出制にかわり、説教所などの多くの宗教施設が寺院となったため、戦後は真宗が最も多くなり、曹洞宗も真宗と同様に、教会が寺院となつて数を増やしたが、真宗には及ばなかった。

真宗が多いのは、町人階級の信仰であつたため碁盤割内にも割りあてられ、町民に対する切支丹取締に一役をなしていたものとも考えられる(資料6)。中川、中村区地域は新田が開発されると、農業が盛んになり、村落が生まれて、郷村制による講組織で広まっていた。また、曹洞宗が多いのは、一四世紀より一五世紀にかけて創建された、熱田寺院をはじめ、根古屋城主(鳴海)安原宗範や小幡城主岡田重頼、御器所西城主佐久間盛次ら、地方の有力な領主層の支持を受けて開かれた寺院、及び織田氏との関係ある寺院も多かったためであろう。